

Y13a 市民科学による「長野県は宇宙県」の近代天文学史 100 年の構築に向けて

大西浩次（国立長野高専）、陶山徹（長野市立博物館）、早川尚志（名古屋大学）、衣笠健三（国立天文台野辺山）、青木 勉、小林尚人、森由貴（東大木曾観測所）、大西拓一郎（国立国語研究所）、渡辺真由子（茅野市総合博物館）、岩田重一、是枝敦子（しなの星空散歩会きらきら）、長野県天文文化研究会メンバー、「長野県は宇宙県」連絡協議会メンバーほか

「長野県は宇宙県」の活動で作られてきた研究者や市民の全県（全国）規模のネットワークを生かして、ここ 100 年間の天文学史・天文文化史を研究者と市民の協働作業で明らかにする企画を進めている。この研究のスタートとして、2022 年に 100 周年を迎える諏訪天文同好会を中心に、ここに関わった県内外の多くの研究者やアマチュア天文家との相互作用や市民への天文普及活動などを調査する事で、日本の近代天文学やその普及活動の歴史を明らかにしたい。この過程で、長野県内には、1921 年から現在に至る 100 年間、長期にわたる太陽黒点観測を行った観測者が多数輩出していることが分かっている。このような観測データは、過去数万年に渡る太陽活動の復元に非常に重要であり、現在、近代 100 年間の太陽黒点数のデータの改正はトピックスのテーマの 1 つである。たとえば、(i) 日本初の長期継続の観測者である三澤勝衛（観測:1921 年～1935 年）、(ii) 世界最長継続観測の田中静人（観測:1926 年～2000 年）、(iii) 現在も継続されている藤森賢一（観測:1953 年～現在）等の観測が知られるが、彼らのデータやメタデータの整備は進んでいない。そこで、彼らの重要な観測データと観測手法（メタデータ）を整理・アーカイブし、過去 100 年間の太陽黒点数を検討する際の基礎データとするため、市民と共にデータの整備を開始した。これらの今後の研究展開は、「長野県は宇宙県」ネットワークを生かした研究者・教育者・学芸員・市民の協働作業による天文学・社会科学分野における「市民科学」の一例となるであろう。